

史跡高遠城跡大手門石垣修理事業

# 史跡 高遠城跡大手門石垣

埋蔵文化財緊急発掘調査報告書

2002.3

長野県上伊那郡高遠町教育委員会

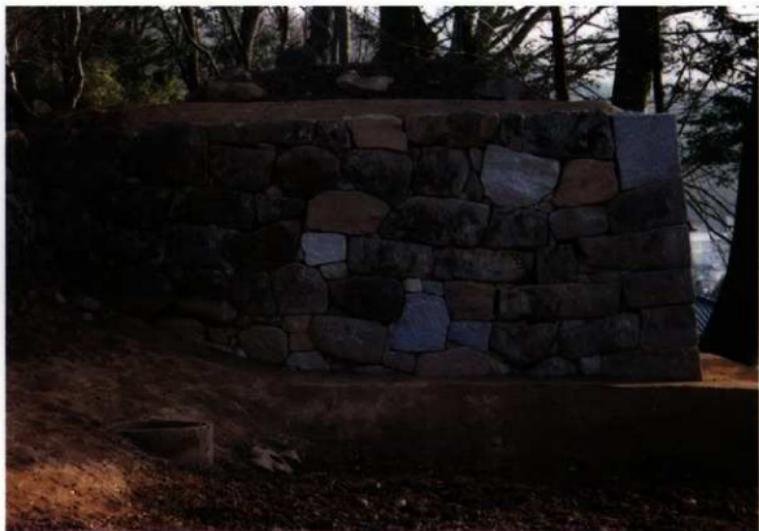
史跡高遠城跡大手門石垣修理事業

# 史跡 高遠城跡大手門石垣

埋蔵文化財緊急発掘調査報告書

2002.3

長野県上伊那郡高遠町教育委員会



1 修理工事完了後の大手石垣（北面）



2 修理工事完了後の大手石垣（西面）



3 修理工事完了後の大手石垣（斜めから）



4 崩落前の大手石垣（平成5年4月8日撮影）



5 崩落前の大手石垣（斜めから）（撮影年月日不詳）



6 調査開始時の大手石垣（北面）



7 調査開始時の大手石垣（西面）



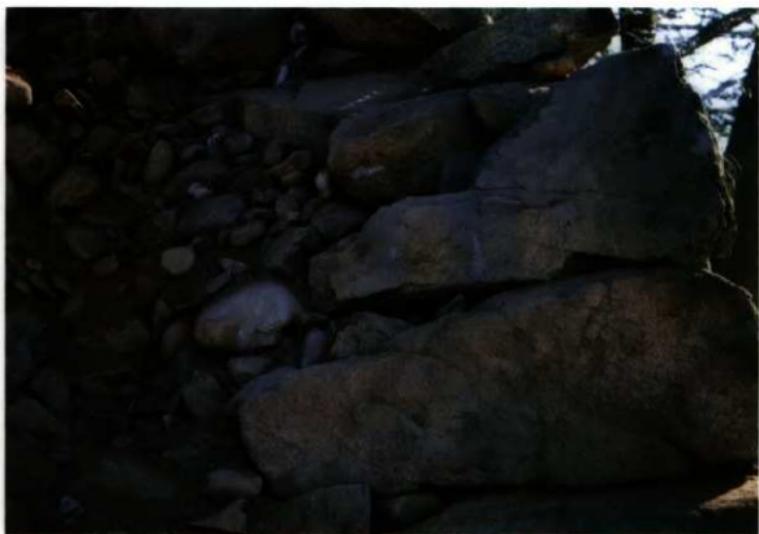
8 調査開始時の大手石垣



9 第一次石垣解体時の状況（全景）



10 第二次石垣解体時の状況（全景）



11 第二次石垣解体時の状況（西侧部分拡大）



12 大手石垣北面前の根石下の状況

## 発刊にあたって

これは平成13年度に実施した史跡高遠城跡大手石垣修理工事に伴い、史跡高遠城跡の現状変更許可の条件である埋蔵文化財発掘調査を実施した報告書であります。また、石垣修理工事によって埋蔵文化財が消滅する箇所もありますので、記録保存を図る目的で調査結果を集録したものです。

高遠城大手門は築城当時は東側にあり、搦め手門は西にあったといいます。藩主鳥居忠春公の頃、城郭が戦闘のため、より威容を示すものと変わっていくに対応して、高遠城西口に大手門が開かれました。こうして高遠は城下町としての発達が促され、城下町としての形態の基が作られました。内藤頼卿公の享保10年（1725）に地震があり城内各所に大きな被害が出ましたが、その時の破損箇所修復の要請を幕府に提出した絵図が残っています。この絵図には大手門、搦め手門、二の丸門、本丸門など枠形及び石垣の状況が記されており、当時の大手虎口の状況がうかがえます。大手門は枠形を形造っていて、第1門は冠木門、入ると枠形、第2門は櫓門でした。今回修復する石垣は大手枠形の石垣の一部が残っているものといわれてきましたが、どの部分のものが判然としません。大手門は明治4年の廃藩と同時に取り壊され、今では往時の景観は失われてしまいました。大手の石垣は高遠城に現在残っている貴重な石垣があるので、今回の発掘調査は大手の石垣そのものを調べることにとどまらず、往時の石垣を築く技術や方法を知る上で極めて大切な調査でありました。

調査の結果、検出された遺構等は調査報告書に図版化して図示しました。石垣の裏込め石、裏盛土の状況、石垣の基礎の状況がわかり、往時の石垣の築き方がわかりました。また、石垣の根石の下にさらに別な根石が発見されたことから、大手石垣は何回も積み替えられ、積み直されてきたことがわかりました。今回の調査では、遺物が出土していないこともありますあって、石垣の作られた時代を特定するまでにはいたっていません。また、石垣が大手のどの部位の石垣であるかも特定されていません。これらの点も含めて調査結果の総合的な検討が今後必要であると思います。

本調査は調査団長に丸山敏一郎氏、調査顧問に友野良一氏、調査員に寺平宏氏を委嘱し、平成13年秋より調査に着手、平成14年3月までに調査を完了しました。また発掘調査の過程で文化庁記念物課本中眞調査官の指導をいただき、長野県教育委員会指導主事出河裕典氏、文化財建造物保存技術協会参与五味盛重氏、史跡高遠城跡整備基本計画策定委員長笹本正治氏による現地指導をいただき、調査を完了することができました。心より感謝申し上げます。また、本調査に参加された作業員の方々、東部建設、峰コンサルの方々にも厚くお礼を申し上げます。発掘調査中にご逝去された調査顧問友野良一先生に心より哀悼の意を捧げます。

平成14年3月

高遠町教育委員会 教育長 中原 長昭

## 例　　言

- 1 本報告書は、平成13年度に実施した史跡高遠城跡大手石垣修理工事に伴う、埋蔵文化財緊急発掘調査報告書である。
- 2 この緊急発掘調査は、史跡高遠城跡内（長野県上伊那郡高遠町大字東高遠2038-1番地他内）大手石垣修理工事に伴い、史跡高遠城跡の現状変更（石垣の発掘調査と修復）許可の条件である発掘調査を実施したもので、石垣修理工事に係る部分について埋蔵文化財が消滅する箇所もあるため、記録保存をも図るものである。
- 3 この緊急発掘調査は、高遠町教育委員会が実施した。
- 4 本報告書は、短期間の内にまとめることが要求されているため、調査によって検出された遺構・遺物をより多く図示・図版化することに重点をおき、資料の再検討は後日の機会に譲ることとした。
- 5 本報告書の執筆者及び図版製作者は次のとおりである。
  - 本文執筆者　丸山 敏一郎・嶋田 佳寿子
  - 図版製作者　丸山 敏一郎・鈴木 和恵・嶋田 佳寿子
  - 写真撮影　丸山 敏一郎・小松 善史・嶋田 佳寿子
  - 遺物整理　丸山 敏一郎・鈴木 和恵・嶋田 佳寿子
- 6 本報告書の編集は、高遠町教育委員会がおこなった。
- 7 遺物及び実測図類は、高遠町教育委員会が保管している。

## 目 次

口絵 カラー写真 .....	①
発刊にあたって .....	⑦
例 言 .....	⑧
第1章 発掘調査の経緯 .....	1
第1節 発掘調査に至るまでの経緯 .....	1
第2節 発掘調査の組織 .....	1
第3節 発掘調査の経過 .....	2
第2章 史跡高遠城跡の環境 .....	3
第1節 高遠城跡の位置 .....	3
第2節 高遠城跡の歴史的環境 .....	4
第3節 絵図に見る大手樹形の状況 .....	6
第3章 修理事業と発掘調査 .....	6
第1節 調査前の大手石垣の状況 .....	6
第2節 発掘調査 .....	11
第3節 石垣修理工事 .....	16
第4章 まとめにかえて .....	20
あとがき .....	25
大手石垣石材チェックリスト .....	27
写真図版 .....	33

## 挿 図 目 次

第1図 高遠城跡の位置 .....	3
第2図 史跡高遠城跡の現状 .....	5
第3図 享保10年 高遠城図に描かれた大手石垣等破損状況 .....	7
第4図 信州高遠城之絵図（正保城絵図）に描かれた大手門周辺 .....	8
第5図 高遠城下明細絵図に描かれた大手門周辺 .....	8
第6図 修理前の大手石垣実測図 .....	9
第7図 調査範囲 トレンチ配置図 .....	12
第8図 第1トレンチ断面図 .....	14
第9図 第2トレンチ断面図 .....	14
第10図 上段の裏込石（石垣背面）の状況 .....	15
第11図 石垣解体後の中段断面図 .....	15

第12図	第3 トレンチ断面図	16
第13図	第4 トレンチ断面図	16
第14図	石垣北面根石部の断面図	16
第15図	根石部石垣内部の断面図（南北）	19
第16図	根石部石垣内部の断面図（東西）	19
第17図	石垣解体終了後の平面図（根石撤去前）	18
第18図	断面図配置図	17
第19図	修復された石垣構造断面図	19
第20図	修理完了後の大手石垣実測図	23

## 図版目次

### カラー写真

1	修理工事完了後の大手石垣（北面）	①
2	修理工事完了後の大手石垣（西面）	①
3	修理工事完了後の大手石垣（斜めから）	②
4	崩落前の大手石垣（平成5年4月8日撮影）	②
5	崩落前の大手石垣（斜めから）（撮影年月日不詳）	③
6	調査開始時の大手石垣（北面）	③
7	調査開始時の大手石垣（西面）	④
8	調査開始時の大手石垣	④
9	第一次石垣解体時の状況（全景）	⑤
10	第二次石垣解体時の状況（全景）	⑤
11	第二次石垣解体時の状況（西侧部分拡大）	⑥
12	大手石垣北面前の根石下の状況	⑥

### 写真図版

1	崩落以前の大手石垣（黒河内太郎氏撮影）	33
2	崩落以前の大手石垣（撮影年月日不詳）	33
3	調査開始時の大手石垣状況（北面）	33
4	調査開始時の大手石垣状況（西面）	33
5	調査開始時の大手石垣（北面）	33
6	調査開始時の大手石垣（斜めから）	33
7	第一次石垣解体時の状況 1	34
8	第一次石垣解体時の状況 2	34
9	第一次石垣解体時の状況 3（中央部の拡大）	34
10	第一次石垣解体時の状況 4	34

11	第一次石垣解体時の状況 5	34
12	角石垣の脇に有る礎石と思われる平石	35
13	第一次石垣解体前の石垣背面の状況	35
14	矢穴のある石材	35
15	角石垣の根石部分の状況	35
16	石垣西面の前面に現れた石列の状況（奥が石垣）	35
17	石垣西面の前面に現れた石列の状況（手前が石垣）	35
18	石垣解体後の状況 1	36
19	石垣解体後の状況 2	36
20	石垣解体後の状況 3（全景）	36
21	石垣北面前面の根石下（第3トレーナー）の状況	37
22	石垣北面前面の根石下の状況	37
23	石垣裏込石下の状況（西から）	37
24	石垣裏込石下の状況（西から 写真23の拡大）	37
25	石垣裏込石下の状況（北から）	37
26	石垣の解体（人力による裏込石の撤去作業）	38
27	石垣の解体（クレーンで石垣を解体する）	38
28	解体した石垣石材をグランドに運ぶ	38
29	グランドに運ばれた石材	38
30	根石撤去後の状況 1	38
31	根石撤去後の状況 2（写真30の拡大）	38
32	飯島町与田切川の資材置場で石材を選ぶ	39
33	資材置場で矢を打ち込み石を割る	39
34	根固め作業の状況	39
35	根固め作業完了後の状況	39
36	石材を割る	39
37	角の一一番根石を据える	39
38	石垣を積む	40
39	裏込石、裏盛土作業	40
40	裏盛土用の土を混合する	40
41	最終段階の裏込石、裏盛土作業	40
42	最後の石を積み上げる	40
43	最後の仕上げ作業	40
44	修理工事終了後の石垣上面の様子	41
45	解体した石材で使用しなかった石材を積み上げる	41
46	調査開始の式	41
47	調査風景 1（調査開始）	41
48	調査風景 2	41

49	調査風景 3	41
50	現地説明会	42
51	現地説明会	42
52	調査の途中で（崩落の恐れがあるための支え）	42
53	調査の途中で（雪の朝の調査開始）	42
54	桜咲く高遠城跡 遠景	42
55	桜咲く高遠城跡と桜見物の人々	42

## 第1章 発掘調査の経緯

### 第1節 発掘調査に至るまでの経緯

高遠城は、武田信玄築城の戦国時代の平山城であり、江戸時代には保科、鳥居、内藤氏などの居城として、明治の廃城までおよそ350年間、南信州の一つの政治的文化的拠点であった。

廃城後も城跡の北西部分（三の丸、勘助曲輪、大手）に改変が見られるものの縄張りの様相をよく留めている。

昭和48年5月26日「三峯川と藤沢川の合流点にある段丘先端部に築かれた平山城できわめて戦国的な城郭の構えをとどめている」として史跡に指定された。指定面積216,219.48m<sup>2</sup>。また、明治8年頃から植えられはじめたコヒガンザクラは、昭和35年2月11日、長野県天然記念物に指定されている（名称 高遠のコヒガンザクラ樹林）。

昭和61、62年度に高遠城跡の「史実に基づき遺構の整備復元等、将来計画を樹立し史跡の存続を図ることを目的」として、保存管理計画が作成された。続いて、この保存管理計画を受けて、平成11、12年度には史跡高遠城跡整備基本計画を策定した。整備基本計画の中で、1. 遺構の保存、修理 2. 縄張りの復元 3. 人々に親しまれた景観の保全 4. 史跡の公有地化の4項目を計画策定の基本認識に位置付け、整備事業を、短期整備範囲と長期整備範囲とに区分し整備事業計画を立案した。

今回の大手門石垣の修理事業は、平成12年11月8日に角石垣が崩落し、さらに周囲の石垣もゆるみが著しく、崩落の範囲が広まるおそれが大きく、もっとも緊急性を要するものである。この事業にあわせて、石垣及び石垣周辺の発掘調査を実施し、遺構の確認調査及び記録保存を行うこととした。

平成13年9月10日 史跡の現状変更許可申請書を提出する

平成13年10月19日 文化庁次長より史跡の現状変更の許可がおりる

### 第2節 発掘調査の組織

#### ○ 高遠町教育委員会

教育委員長	横田 稔	委 員	廣瀬 千代美
委員長代理	阪下 哲彦	"	原 太郎

教 育 長	中原 長昭	生涯学習係	小松 善史
教 育 次 長	伊藤 順一	"	田辺 恵一
生涯学習係長	丸山 敦	"	鶴田 佳寿子

#### ○ 発掘調査団

調査顧問 友野 良一（日本考古学協会員・東洋陶磁器学会員）  
(平成13年12月まで)

発掘担当者・調査団長

丸山 敦一郎（日本考古学協会会員）

調査員 寺平 宏（第四紀学会会員）地形・地質

○ 発掘調査に参加された方々（敬称略）

池上 賴子 伊東 晃 北原 幸司 篠田 竹次

鈴木 和恵 藤田 明

(有) 東部建設 (株) 峰コンサル

第3節 発掘調査の経過（調査日誌より）

平成13年

- 9・7(金) 調査顧問友野良一氏、調査団長丸山敦一郎氏、事務局による事前打ち合わせ。  
11・5(月) 安全祈願の後、調査開始。  
11・6(火)～ 裏込み及び裏盛土調査のため、第1トレンチ、第2トレンチ設定後、掘削。  
11・7(水) 測量および、B.M.の設定。  
11・15(木) 史跡高遠城跡整備基本計画策定委員長笛本正治氏による現地指導。  
12・10(月)～ 第1次石垣解体により、石垣崩落危険箇所解体。  
12・12(水)～ 根石調査開始。第3トレンチ、第4トレンチの設定。  
12・25(火) 寺平宏氏による地質確認調査。

平成14年

- 1・9(水) 石垣下段調査開始。  
1・11(金) 西面より新たな根石検出。  
1・18(金)～ 第二次石垣解体工事。  
1・21(月) 石垣根石詳細調査開始。  
1・28(月) 長野県教育委員会出河裕典指導主事、五味盛重氏による現地指導。  
2・1(金) 史跡高遠城跡整備基本計画策定委員長笛本正治氏による現地指導。  
2・12(水) 文化庁にて修理工事及び発掘調査の今後の進め方について検討。  
2・17(日) 現地説明会 参加者 約40名  
3・1(金) 石垣の石材記録及び調査。  
3・5(火)～ 第3次石垣解体工事。  
3・14(木) 根石確認調査終了により、発掘調査終了。  
3・18(月) 石垣積み直し工事開始。  
3・29(金) 石垣積み直し工事竣工。完成した石垣の実測。

## 第2章 史跡高遠城跡の環境

### 第1節 高遠城跡の位置



- 1 上手垣外 2 桂泉院 3 花畠 4 堀
- 5 西勝間 6 後沢 7 北垣外 8 竹垣外
- 9 的場の城山 10 山田城 11 丸山城 12 山田古城

高遠城跡は南アルプスから東に流れる三峯川と中央構造線に沿って南に流れる藤沢川に挟まれた台地上に位置し、西、南、北は三峯川と藤沢川とに浸食されて急峻な崖となっている。東は月藏山の山麓まで続く平坦面である。標高およそ805メートル内外である。

城跡から三峯川の谷奥に南アルプスの仙丈ヶ岳を仰ぎ見、西に向かっては高遠町の町並み、伊那市市街とその背後の中央アルプス連山を望むことができる。天險の要害であるとともに絶景の地にある。古くから交通の要所でもあり、上伊那地方の政治文化の中心であったが、飯田線の開通にともないその役目を伊那市にゆずった。

高遠城跡の位置する台地上、三峯川の対岸の勝間地区、小原地区、下山田地区、藤沢川の対岸の的場地区、高遠町市街地には縄文時代、弥生時代、古代の遺跡が所在し、また未知の遺跡が所在すると予想されるが、勝間地区の堀遺跡以外は学術的な調査が行われていないため詳細は不明である。また、的場地区の城山、下山田地区の古城・山田城・丸山城・与市城・小池城、藤沢川に沿って台の城山・栗木田城・中条の城、長谷村の非持城・溝口上ノ城・溝口下ノ城・良城・神明城など中世の山城あるいは居館跡と伝承される遺跡が点在しているが、詳細は不明である。(第1図)

## 第2節 高遠城跡の歴史的環境

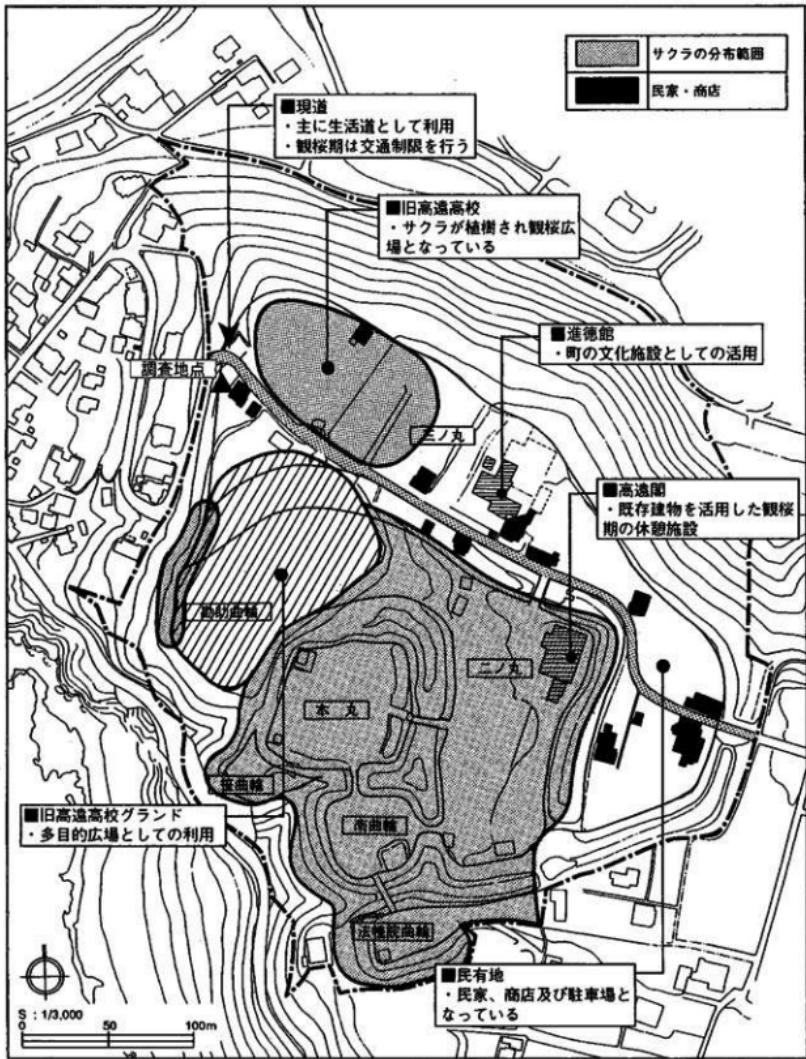
高遠城を現在の位置に築城した確実な資料と言わわれているものは、武田信玄の側近の臣、駒井高白斎が記した『高白斎記』である。これには天文16年(1547年)3月のところに、「高遠山の城歛立て」とある。これは信玄がまったくの処女地に築城したのか、あるいは信玄に滅ぼされた高遠氏の居住地を拡張改修したのか明らかではないが、当時築城技術に秀でていた山本勘助の繩張りによって行われたと伝えられており、本丸西側の一画に勘助曲輪の名が残っている。これらのことから高遠城は信玄が築城したと考えられている。

築城以来、武田氏(35年間)、保科氏(53年間)、鳥居氏(53年間)、幕府領(2年間)内藤氏(182年間)と約350年間にわたり南信州の中心として栄えた城である。

残された絵図が十数点ある。絵図により城跡の変遷をたどると、保科氏以前の曲輪には笹曲輪が無く、本丸と二ノ丸の間は土橋でつながっていて、南曲輪と二ノ丸の間の空堀も両曲輪の中央付近にあり、方向も東西に向かって造られていたようである。鳥居氏の時代になって、大手の位置が東から西の現在地に移されたようである。絵図には石垣、土居、空堀、塙などが克明に描かれたものもあるが、絵図によって少しずつ違いがある。大手門、搦手門、二の丸門、本丸門には櫓門があり、石垣が築かれていたことがわかるが、現在石垣が残っている部分は少なく、大手門と本丸の一部に残っている。総じて石垣の築かれた部分の少ない城であったと思われる。土居は本丸、二の丸に一部残っている。内藤氏の時代、宝永、享保年間の地震のため城内の石垣・土居が崩落し、破損個所を修復したことが記録されている。

その後廃藩となり城内の建造物、樹木、城地の一部が払い下げられた。

高遠城跡の現状をみると、二ノ丸、本丸、南曲輪、笹曲輪、法幢院曲輪はほとんど国有地、町有地であり、曲輪、空堀などもよく残っており、往時の城郭の様相をうかがい



第2図 史跡高遠城跡の現状（『史跡高遠城趾整備基本計画書』より抜粋）

知ることができる。三ノ丸は民有地が多く民家、商店が建っており、各種の看板なども多く雑然としている。三ノ丸の北西部はかつて長野県高遠高等学校の敷地であり、また、三ノ丸西側から勘助曲輪にかけては曲輪を削り堀を埋めてグランドに造成したために大きく改変されており、往時の痕跡を留めない（第2図）。

現在の高遠城跡は史跡として良好に遺構を残す全国的にも注目される中・近世の城郭跡であるとともに、長野県天然記念物に指定され、全国的にも知られるコヒガンザクラの名所でもあり、桜期には30万人を超える観光客が訪れる。史跡としての高遠城跡、桜の名所としての高遠城跡、両者が成立つ整備を進めなければならない。

### 第3節 絵図に見る大手櫓形の状況

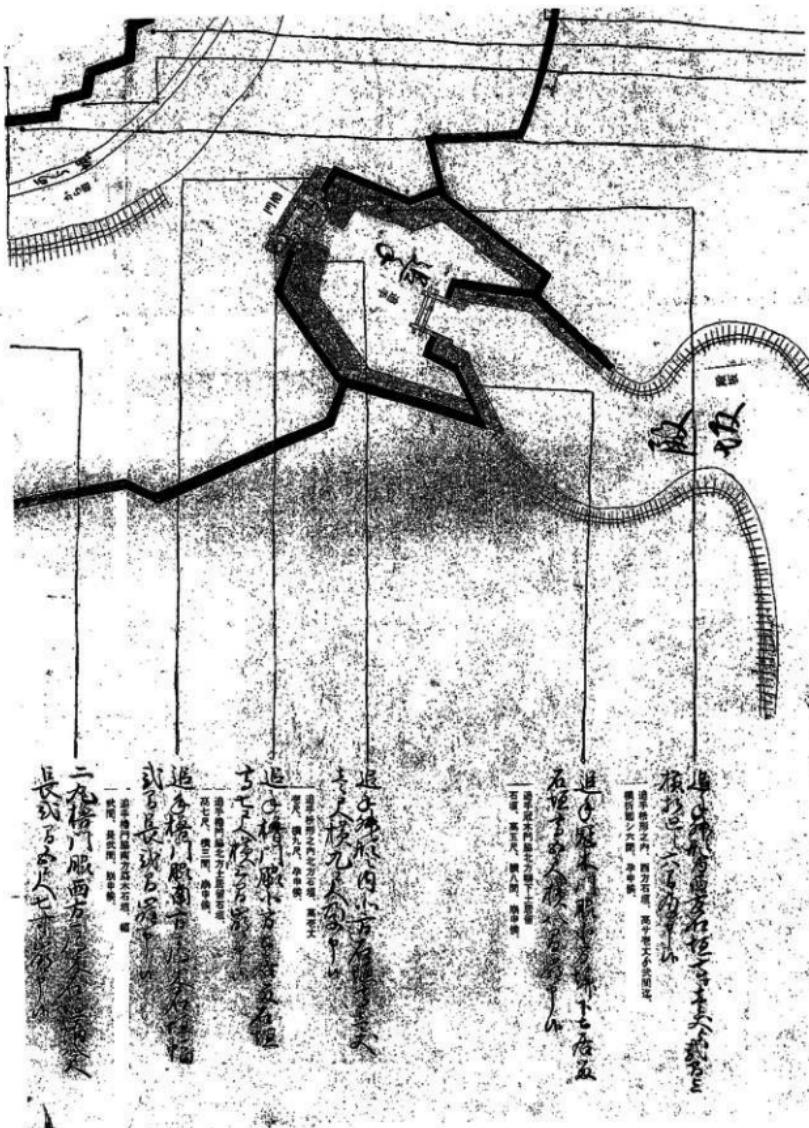
いくつかの高遠城跡の絵図に大手門が描かれている。時代的な変遷による相違もあるが、防護の目的から正確に描写しなかったとも考えられ、絵図によってその描き方が違っている。第3図は享保10年の大地震による石垣、土居の崩壊状況を報告し、修復の要請を幕府に提出した絵図である。大手門周辺の状況が詳細に描かれていて、これによると大手門周辺は石垣を築き冠木門、櫓門が設けられており、冠木門にいたる殿坂には柵があったことがうかがわれる。第4図は信州高遠城之絵図（正保城絵図）、第5図は高遠城下明細絵図の大手門周辺の状況を描いたものである。第3図の大手櫓形の形状とは相違しているが、第4図、第5図はよく似ている。石垣の位置、冠木門入り口部分が信州高遠城之絵図では石垣、高遠城下明細絵図では堀となっているなど細部には違いが多い。他の絵図でも大手櫓形は信州高遠城之絵図、高遠城下明細絵図に近い形で描かれているものが多い。なお、信州高遠城之絵図の大手部分に「此石垣高至間五尺五寸 南方横十五間二尺 北方拾間三尺 高北南同」と添え書きがしてある。大手櫓形の西北、殿坂を登りつめたところの左側に、高さ2mあまりの石垣が築かれているが、絵図に描かれた石垣の一部である可能性もある。また、『信府統記』「高遠城開起並びに城主交替年数」には、城の歴史、変遷と城郭の構成について記されており、大手については「大手門櫓 一つ五間に二間 同番所南の脇にあり」と記されている。現存する大手門石垣が大手門のどの部分であったかは定かでない。

## 第3章 修理事業と発掘調査

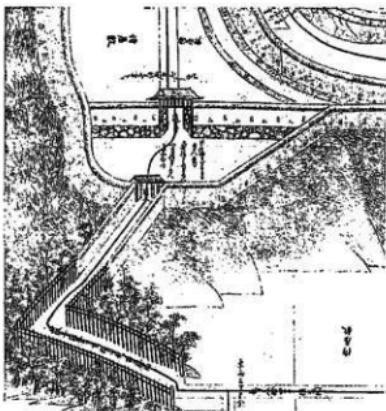
### 第1節 調査前の石垣の状況

享保10年の大地震により、城内各所の石垣、土居等が崩壊あるいは破損した状況が、その修復の要請を幕府に提出した絵図に記載されている。大手門周辺について、「追手櫓形之内、西方石垣高サ丈六尺間迄横折廻シ六間孕申候」等と詳細に破損の状況が記載されている（第3図）。この他にも何度もなく石垣、土居などの崩落があり、修理が行われたことが記録に残されている。新しいところでは、『昭和31年春 大手門石垣修理の後』（黒河内太郎氏蔵）と記された写真が残されているが、どの部分をどのように修復したかは定かではないが、石垣北面の東側三分の二位は草木がそのまま残っている写真的状

高遠城図 享保10年



第3図 高遠城図(享保10年 75×60.5)  
享保10年大地震による大手門周辺の破損状況



第4図『正保城絵図 高遠城』  
(正保年間) (東西255cm×南北88cm)



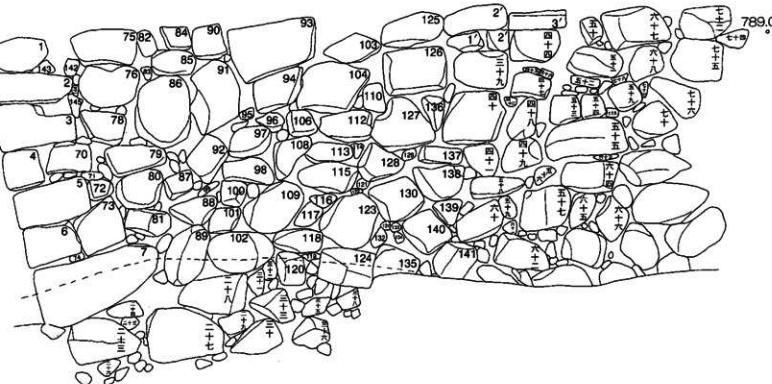
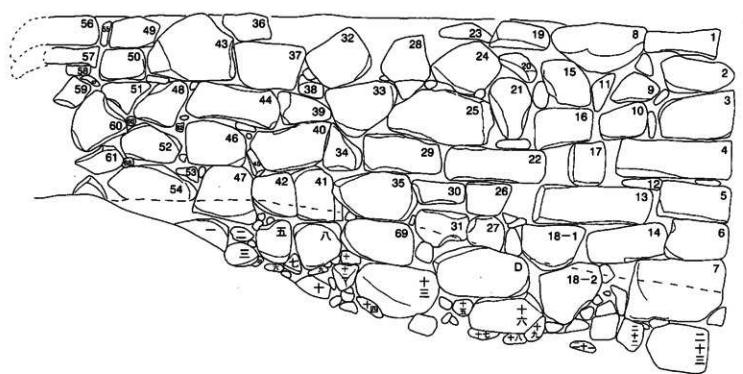
第5図『高遠城下明細絵図』  
(江戸後期) 黒河内太郎氏所蔵

況から見て、今回崩落した角の部分を修理したように思われる。石垣の前に現在はない木が写っており、脇には崩落した石材と思われるものが転がっている〔写真1〕。

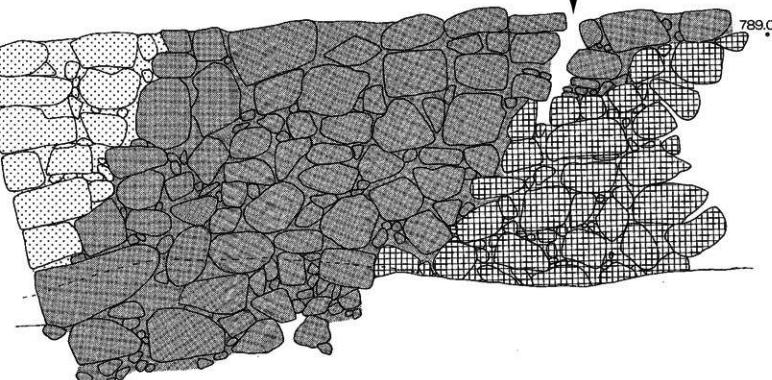
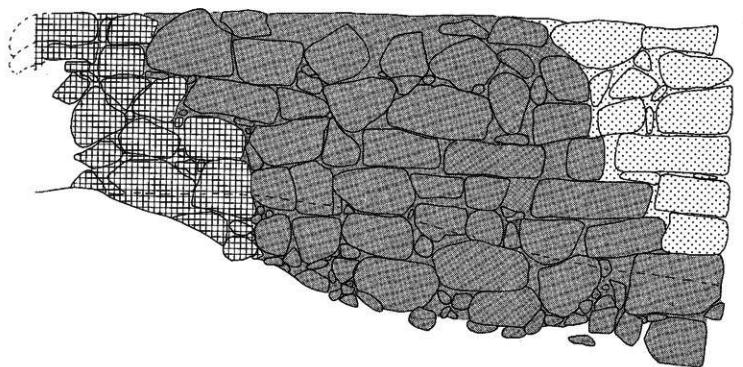
大手門石垣の一部と想定されている石垣が残っているのは、北西部端を角として、北と西の2面である。往時の様相を良く伝えているのは北面で、東端を民家（関氏宅）の石垣と直角に交わっている。およそ幅7m、高さ3m弱である。下部の三分の二位は比較的大きな石材で整然と積み上げてあり往時の姿を残していると思われるが、前方と西側に孕み出していて、石と石との間の隙間が広がっている。上部三分の一、及び先端部は積みなおされていると思われる。西面は南方に26mほど伸びているが、南の10m程はコンクリートで補強されている石垣などもあり、新しい石垣で、何處かに分けて積まれている。古い姿を残していると思われる北側の16mも積み直しがあったようで、積み方が乱れており、石垣積みの弱点となる、目通りや重箱積みなどが隨所にあり、大きく孕み出している。崩落前に作成した西面の実測図を見ると、何本か石垣角から南に向かつて斜めに目通りした箇所があり、石垣積みなおしの痕跡とも思われる。北面、西面共に天端石がそろっておらず、高さも3m弱と低く、当初は石垣の高さがもっと有ったと思われる。北面は人目につきやすい位置にあり見栄えよく丁寧に積み上げてあるが、西面は近くでは見えない位置にありやや雑に積み上げられたかにも思われる。

平成9年、石垣の孕み出しが大きくなり、崩落のおそれがあったために石垣の測量と崩落に備えての防護柵の設置を行っている。修理前の石垣実測図は平成9年の実測図を基本図とし、西面について修理工事が新たに及ぶ範囲を追加した（アラビア数字の番号が付されているものは平成9年の実測　今回追加したものは漢数字等で表記してある）(第6図)。

先端部は平成12年11月8日に崩落した。



石垣の曲点であり、下部がはり出している。  
この空白部分は実際は連続している。



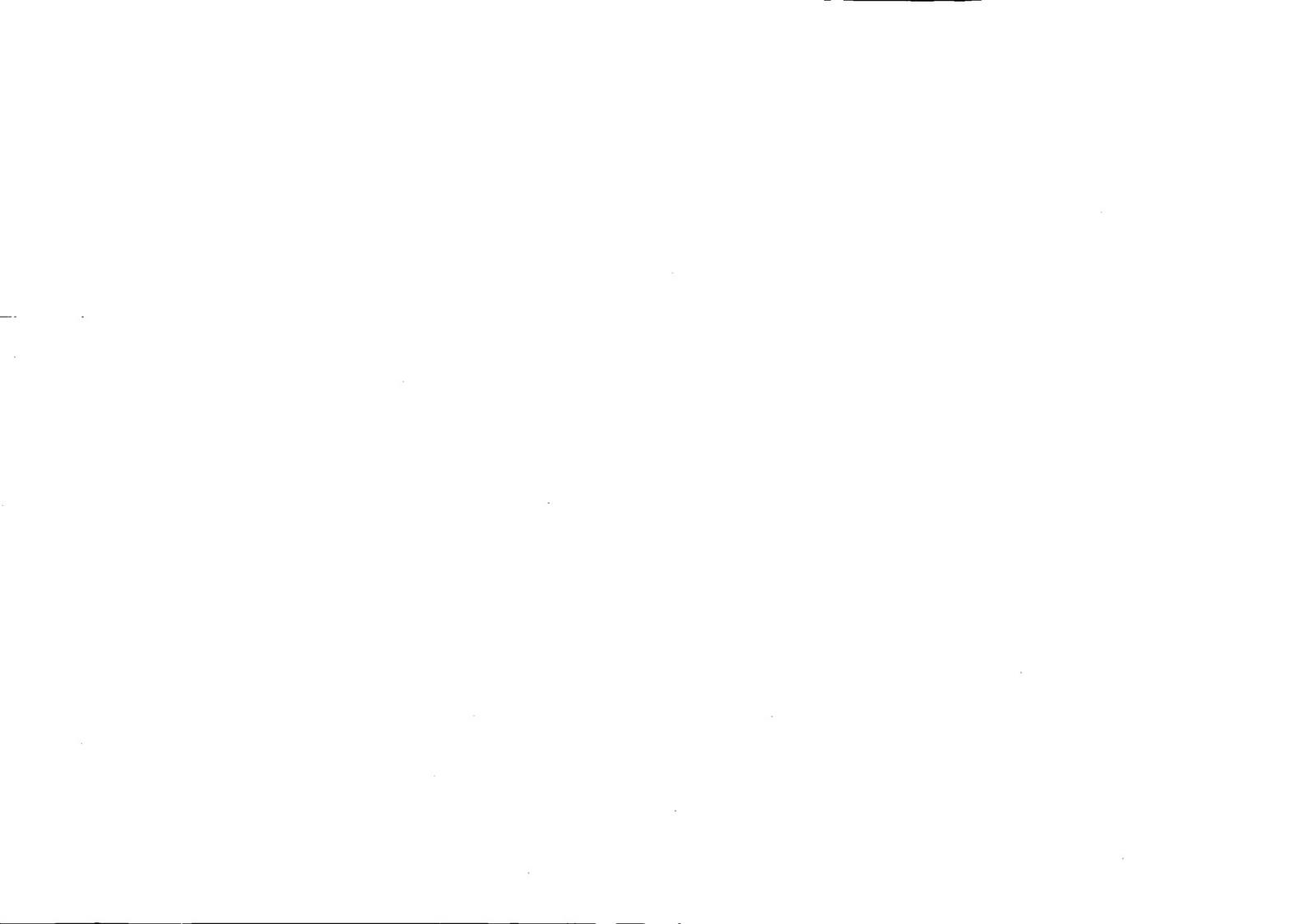
崩落した部分

解体した部分

原状

0 1:40 2M

第六図 修理工事前の大手門石垣実測図



## 第2節 発掘調査

修理事業を行う大手門石垣の一部と想定される石垣は、長野県上伊那郡高遠町大字東高遠2038-1, 2039-2, 2353番地に位置する。今回、石垣修理工事に合わせて行った発掘調査では、次の事項を確認することとした。

- ① 石垣積み替えの状況、範囲の確認
- ② 石垣背面の状況 ..... 脊込め石、友石（カイ石）などの確認
- ③ 裏込石、裏盛土の状況 ..... 施工範囲、栗石の状況の確認
- ④ 基礎の状況 ..... 根石、おさえ石の確認
- ⑤ 石垣の基盤の状況
- ⑥ 排水施設等の有無の確認
- ⑦ 現存する石垣は大手門石垣のどの部分に当たるか確認したい。

調査区を第1・2・3・4トレーニングと解体部分全域及び解体部分の石垣の前面に設定し、調査を行った（第7図）。

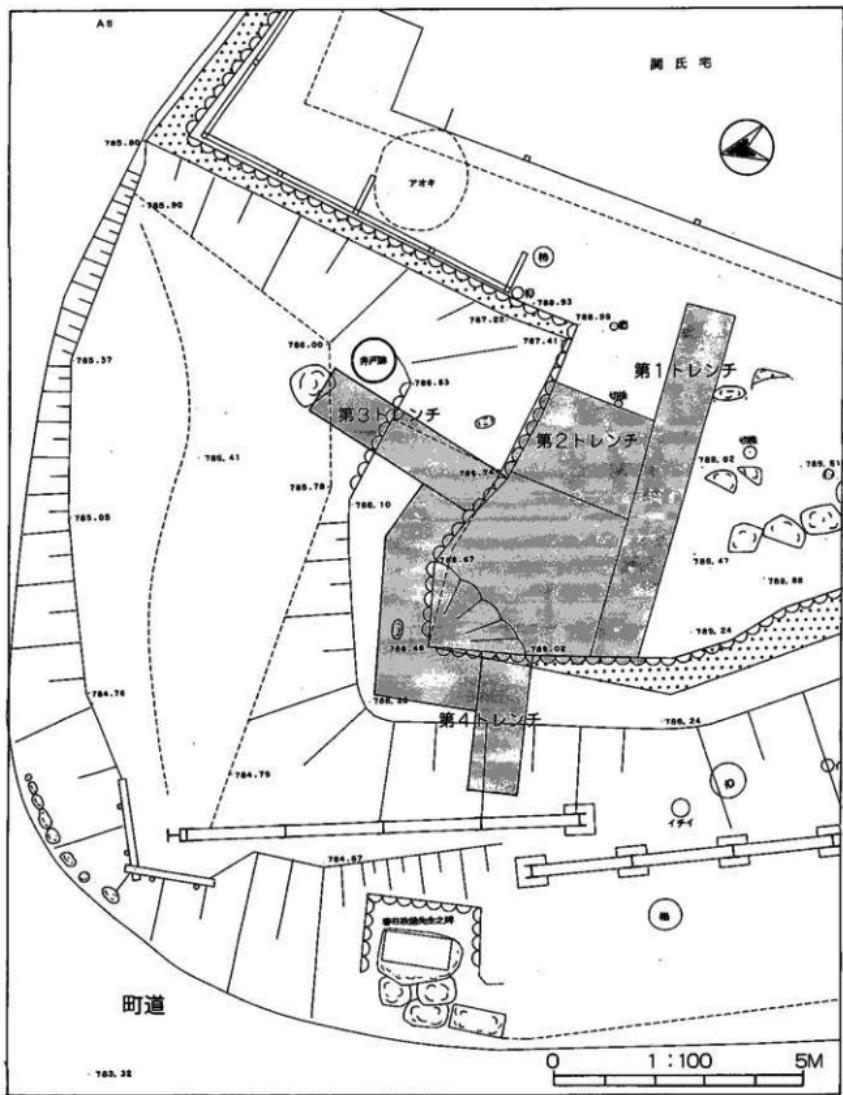
第1トレーニング、第2トレーニングを設定し、石垣の裏込石、裏盛土の様子などを確認することとした。関氏宅の庭園になって居た場所であり、かつては多くの樹木が植えられており攪乱も多く、西面石垣の脇には櫟の大木が何本もあり、これら樹木の落ち葉が堆積した腐植土の中には瀬戸物、ガラスビンの破片などが散乱している。現地表面からおよそ80cm程下から、やや赤みがかかった粘土を堅く叩き締めた裏盛土が現れ、裏盛土と上面の小石を含んだ褐色土とは明瞭に区分することができる（写真9）。西側石垣部分では緩やかに、北側石垣部分では急勾配で石垣に向かって下がっていく。石垣と裏盛土の間は裏込石で満たされている。裏込石は拳大から人頭の大きさの川原石を用い、石垣に近い部分は土を含まず石だけで、石と石との間は空間となっている。この空間にはリスが飛び込んだと思われるクルミなどがあちこちにあった。西側石垣の裏込石の裏盛土よりも上部からの土壤（黒色土）が石と石との隙間に流れ込んでいる。石垣の積み方を見ると、外見で予想したよりも、控えの大きい石材を用いており、裏込石も古風であり、積み直しが行なわれているとしても江戸期のものであろうか（第8図 写真7・8・9）。北側石垣東端部の裏込石、裏盛土は当初の様相をよく残しているものと思われる（第9図 写真10・11）。

また、石垣から少し離れた部分の所々に大きめの石を据えて、裏込石を安定させている様子がうかがえた（第10図 写真13）。

修理のために解体される部分の調査（中段）でも裏込石の状況は同様であったが、裏盛土と裏込石の間に流れ込んだ土壤（黒色土）が第1トレーニングよりも広範囲であり量も多い。

崩落部分の裏込石の状況は石垣と共に大きく崩落しており確認できなかった。

石垣前面の状況を把握するために、北面する石垣の前に、第3トレーニングを南北に設定



第7図 発掘調査範囲

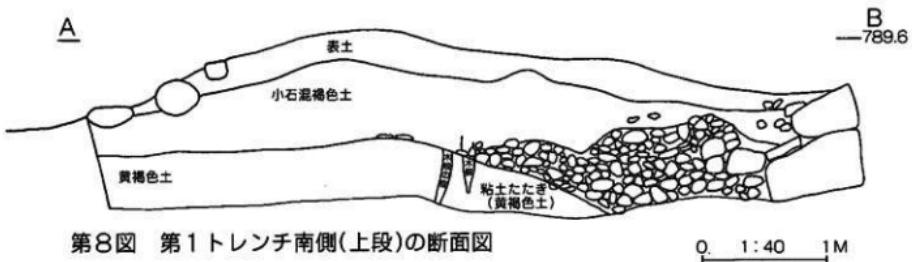
した。石垣前面は畠として耕作が行われた時期もある。8m程の間に途中低い石垣を築き畠を二段に区割してある（調査の時点では畠として利用はされていない）。平成9年の調査では往時の地表面と思われる石敷きの平面があったと記録されているが、明確なその痕跡を認めることは出来なかった。石垣の前面は石垣を積み上げる前は、窪地となっており、石垣の基礎を造成する際に、運び込まれた土が何層にも帯状に重なっており、土を運び突き固めていった様子がよくうかがえる。石垣の根石に近い部分がより丁寧に突き固められており、粘土や火山灰、黒色土などが意識的に敷き詰められているように思われる。造成された基盤の厚さは2mにも達し、最深部から竹炭や焼物の小破片がわずかに検出されている。その下は地山と思われる疊層である（第12図 写真21）。

西面する石垣の前に第4トレーニングを東西に設定した。この部分の平坦面は1.5m程で、西側は急傾斜となって町道へ向かって落ち込んでいる。北面する石垣前と同じ様に土を運び込み突き固めてある（第13図）。石垣の根石よりも若干低い石垣前面に、ほぼ同じレベルで幾つかの河原石が配されているのは北側と相違している。石垣の北西端角の周辺調査で、この配石は南北に2.3m続いており、河原石の薄い円石を並べたものであり、石垣に面する東側の面がそろえられている。おそらく石垣と直接関係する遺構ではなく、石垣を積み上げる以前の遺構と思われる（第17図 写真16・17）。石垣の北西端角の北側に礎石とも思われる平石が一つあったが、礎石にしては石の下に栗石もなく特別丁寧に据えつけたようには思われない（写真12）。

上段の石垣を解体した後に、中段の裏込石、裏盛土の状況を調査した。裏込石、裏盛土の状況はおおむね上段と同様であったが、堅く叩き締められた裏盛土の下に、つるはしで打ち欠くのも困難なほど堅く叩き締められた盛土が現れた。この盛土の西端に土留めと思われるのみで整形された石などが据えてある。調査区の東端でこの盛土の下に黒色土と拳大よりやや大きい石を含む層が確認された。色調などの状況から考えて、裏盛土とは考えられず、大手石垣よりも時期的に古い構造物であったように思われる。先にも述べたが、裏盛土と石垣の間の裏込石の隙間には大量の黒色土が流れ込んでおり、石垣を積み直した痕跡であろうか。また、石垣が孕みだす原因ともなっていたと思われる（第11図 写真20）。中段の石垣解体後、下段の裏込石の状況を調査した。修理工事への影響もあるので、裏込石は撤去しなかったため、裏盛土の状況は確認できなかった。裏込石は上段、中段と同様拳大から人頭大の河原石を用いており、石と石との間に隙間があり、黒色土も流れ込んでいる。北側石垣の裏込石と石垣の間、30cm程は黒色土が充満しており、石垣が前面にすりだしその隙間に土（黒色土）が流れ込んだようである。

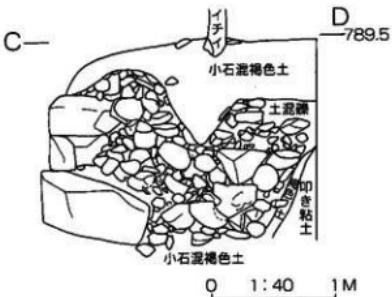
根石を残して、石垣の解体が終わったところで、根石の下の状況を調査した。根石をおさえるおさえ石、栗石は確認されず、根石の縁に拳大の石が数個あるだけで、直接造成した基盤の上に根石を据えて石垣を構築している。根石の下の基盤は、第3トレーニングで確認された方法と同様に、土を運び込み突き固められており、その様子がきれいに層をなしている（第14図 写真22）。

石垣全体を支える根石は、相対的に小ぶりである。一番重量がかかり、最も重視しなければならない角の根石（二十三）の大きさは、南北に長くその長さは65cm、東西の長



第8図 第1トレンチ南側(上段)の断面図

0 1:40 1M



第9図 第2トレンチ東側の断面図

が後面よりも低くなっている。角の根石（二十三）の上に積まれた、今回の修理工事で解体された石材の中で最も大きい7（一番角石 面の長さ65×102cm、控え115cm 重量2.2トン）は根石の面から北側（前面）に20cm程せり出している（第6図 写真15）。

西面の石垣の根石は、二十三、二十七の南側は大小さまざまな石材が乱積みされていて規則性は見られない（第6図）。

第17図は、根石を残してほぼ石垣の解体が終了した時点での平面図である。石垣の角の部分は直角ではなく、北面も西面もわずかにカーブを描いている。西面にはほぼ平行して河原石を配した石列が確認されたが、根石よりも若干低い位置にあり、石垣に相対する面がそろえられている。石垣を積み上げる以前の遺構と思われるが定かではない。

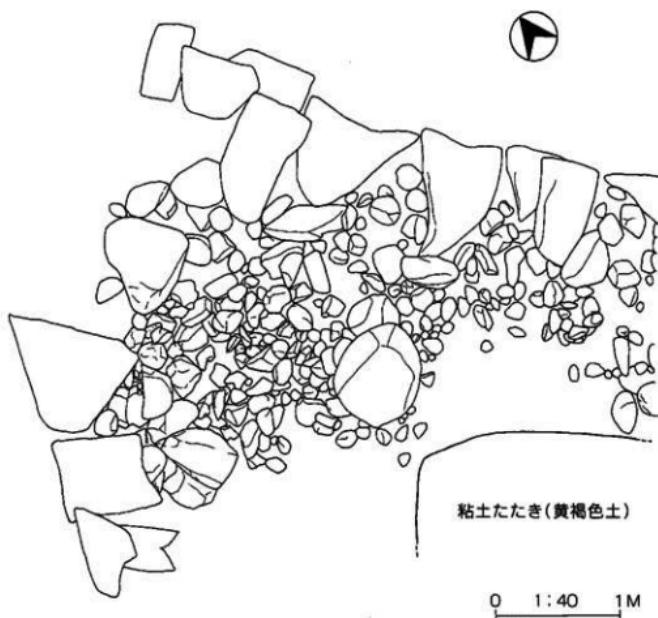
現状の根石では石垣を支えきれないで、取りはずし新しい根石を据えることになった。根石を取りはずした状況でも栗石、おさえ石ではなく、根石は基盤の上に直接据えられたことが確認された（写真30・31）。

新しい根石をすえる根固めのために掘削を行った部分の裏盛土の状況は、第3トレンチ、石垣前面の基盤造成と同じように土を運び込み突き固めてあり、根石の下はより丁寧に造成してある。（第15・16図 写真23・24・25）。

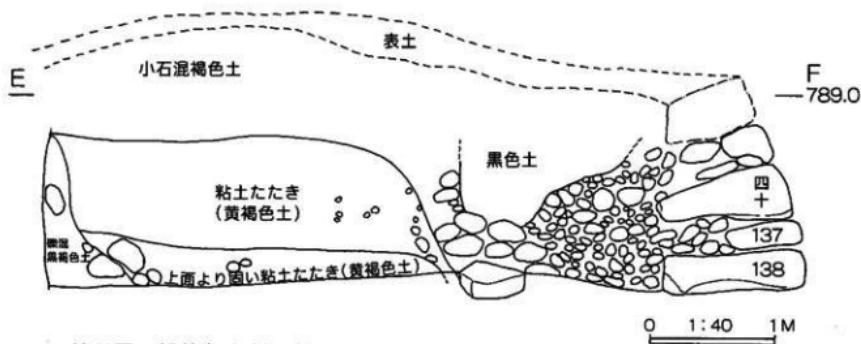
排水施設、犬走りなどの遺構は今回の調査では確認できなかった。

さは60cm、厚さ40cmであり、特段調整をした様子もない、やや丸みをおびた石材を用いているが、角石垣1から7までの総重量だけでも4.5トンもあり、この重さを支えきれるとは考えられない。角の根石の南に並んでいる根石（二十七）は、丁寧に手斧で調整が行われており、角の根石にふさわしく、別の場所で角石として使用されていたものが転用されていると思われる（第6図 写真15）。

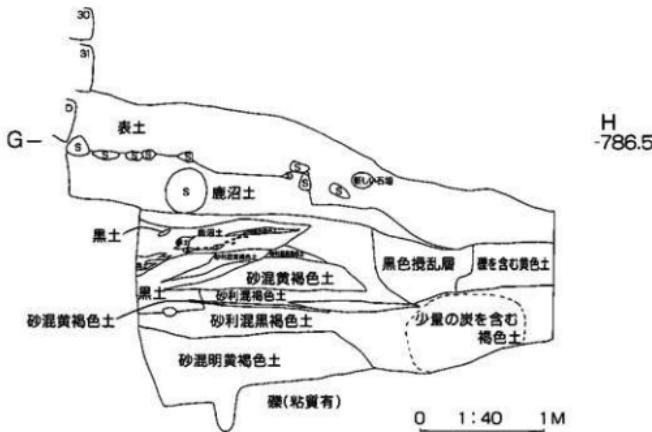
北面の石垣の根石は、上に積まれた石垣の重量に耐えられずに、前面



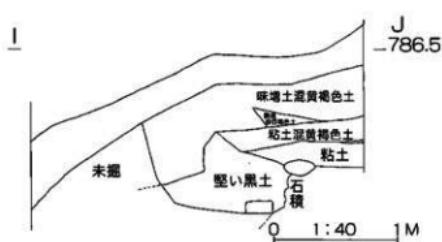
第10図 上段の裏込石(石垣背面)の状況



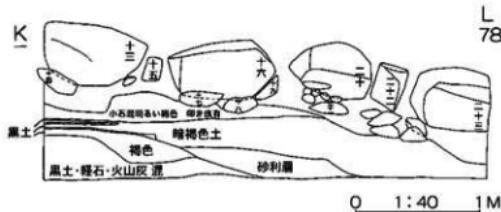
第11図 解体部中断の断面図



第12図 第3トレーニング西面断面図



第13図 第4トレーニング南側断面図

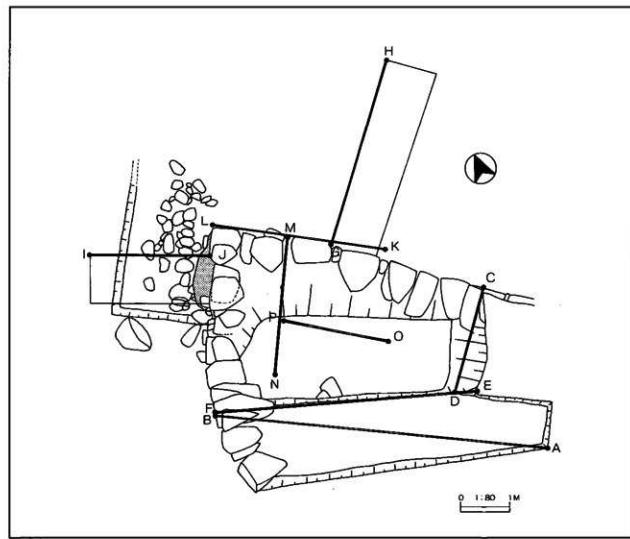


第14図 北面石垣根石下断面図

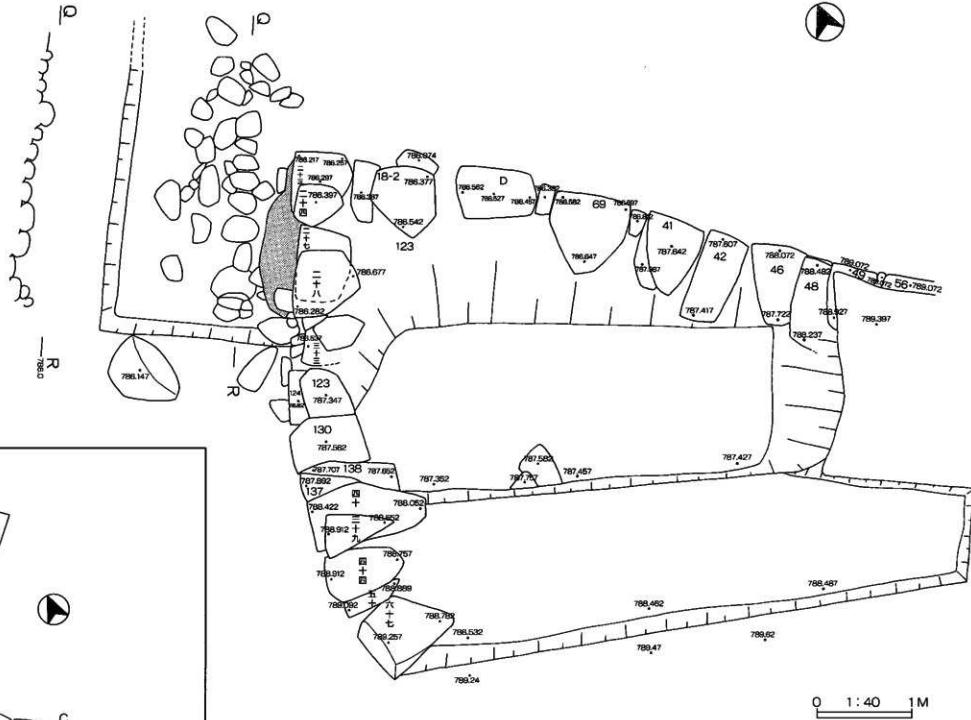
### 第3節 石垣修理工事

石垣修理工事は、石垣全体の孕み出し、根石の状況等から判断して、文化庁とも協議し、当初の計画よりも広範囲にわたって修理することになった。

石垣修理工事は地元高遠町の有限会社東部建設が請け負い、石積工事は株式会社誠和（東京都 梶原村上金治氏）が行った。できるだけ石垣が積まれた時の姿に近づけ、使える石材は用い、元の位置に積める石は元の位置に据えるように努めた。北面の石垣は多くの石を元の位置近くに据えることができたが、西面の石垣は、角石垣を除いて、ほとんど元の位置に積むこと

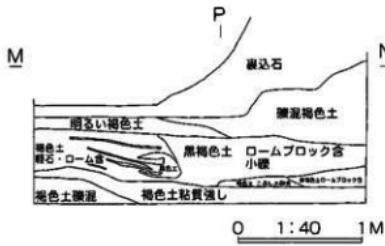


第18図 断面図配置図

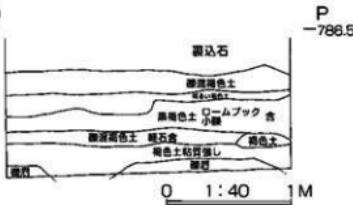


第17図 石垣解体終了後の平面図（根石撤去前）





第15図 石垣基礎部西面断面図

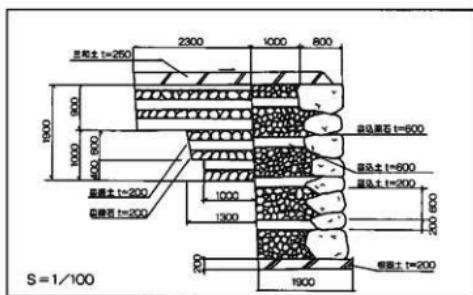


第16図 石垣基礎部北面断面図

ができず、転用材、新補材を用いることになった。新補材の大部分は有限会社上沼組（飯島町）から調達し、一部、高遠町の月藏山の石材を用いている。

石垣の基盤は、東西4.7m、南北3.5m、幅1.8mを鍵の手に、根石撤去面から20cm程掘削し、新たに基盤を造成した。根固土は粘性土・碎石・石灰を混合したものである。修復した石垣の仕様は第19図のとおりである。裏盛土は粘性土と石灰、最上部の三和土は粘性土・粒調碎石・生石灰を混合したもので、裏込石の栗石は修理前に使われていたものを使用してある。修理した部分と修理しなかった部分との境に鉛板を配置した。修復前の裏盛土、裏込石の造成方法とは大きく異なっている。

第20図は修理工事が完了した時点での実測図である。



## 第19図 修復された石垣の構造断面図 (東部建設 しゅん工報告書より)

## 第4章 まとめにかえて

今回の発掘調査では次のことを調査の目的として行ったが、解明されたところは少ない。

- ① 石垣積み替えの状況、範囲の確認
- ② 石垣背面の状況 ..... 脊込め石、灰石（カイ石）などの確認
- ③ 裏込石、裏盛土の状況 ..... 施工範囲、栗石の状況の確認
- ④ 基礎の状況 ..... 根石、おさえ石の確認
- ⑤ 石垣の基盤の状況
- ⑥ 排水施設等の有無の確認
- ⑦ 現存する石垣は大手門石垣のどの部分に当たるか確認したい。

石垣積み替えは、石垣崩落のたびに、何回か行われている。何回、どのくらいの規模で行われたかはわからないが、西面の石垣の状況を見ると、石垣積み直しの痕跡と思われる斜めに目通りした線が數本読み取れる。また、花崗岩ではない河原石などが用いられていたり、三十七や五十七のように手斧で加工された石材が不自然なところに据えられているものもある。平成12年に崩落した部分についてはまったく不明であるが、調査した範囲では積み直しをしたとしても控えを大きく取った石材の用い方、幅広に裏込石を積み上げている状況などから考えて江戸時代の積み直しと思われる。角の部分を中心に数回積み直しが行われていると思われる。

石垣背面の様子は、図版や写真で観察していただきたいが、脊込石などもしっかりとしているところが多く、古法に則った積み方をしていると思われる。

裏込石、裏盛土も古法に則って造成されていると思われるが、調査が石垣修理のためのものであり、基盤まで調査することはできなかった。裏盛土はおそらく石灰などを混ぜて粘土を突き固めたものであろう。

石垣の基礎は、石垣を築く際に、大手の位置がくちばし状に突き出した台地の先端にあり、大きな窪地となっていたため、大掛かりな盛土をしている。確認された範囲でもその厚さは2mに達している。この地に幅50mを超える大手樹形を確保するのは相当大規模な工事であったと思われる。基盤造成のため土を運び込み叩き締めていった様子がよく観察でき、特に根石の下は丁寧に土を選んで運び込み突き固めてある。

今回の調査で一番気になったことは、石垣全体に比べて根石があまりにも小さく、おさえ石も無く、造成した基盤に直接据えられており、全体を支えるにはあまりにも頼りないということであった。

排水施設などは確認されなかつたが、石垣の西面にはほぼ平行した石列が確認されたがその性格は不明である。

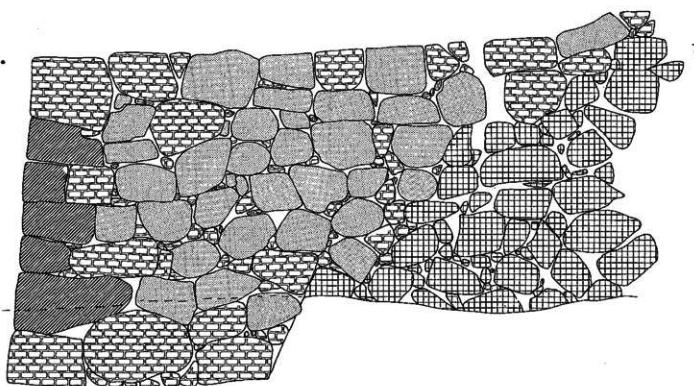
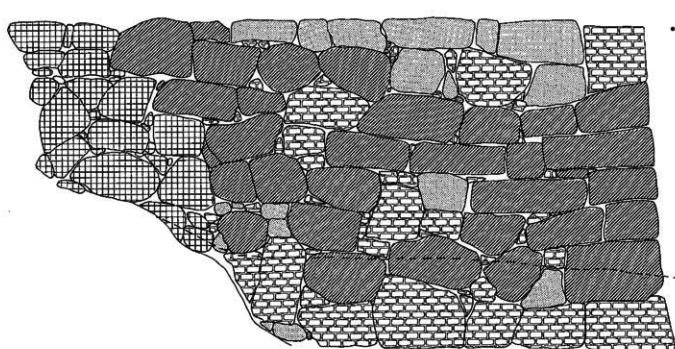
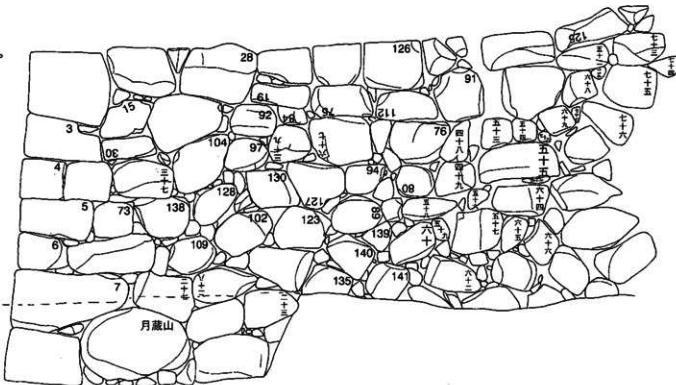
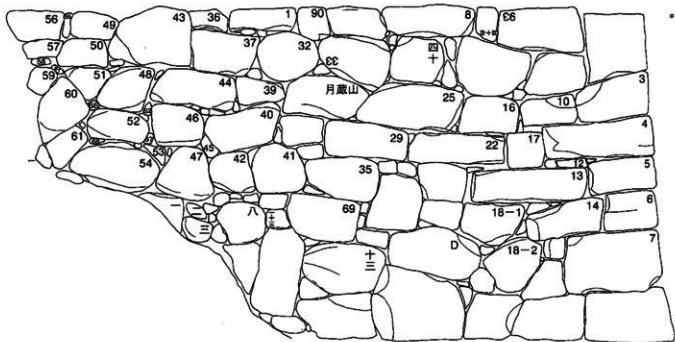
大手石垣と想定される石垣が、大手樹形のどの位置にあたるかは解明できなかつた。城の玄関口、冠木門、樹形、そして威容を誇った櫓門がこの地にあったことは間違いない。大手樹形はおそらく幅50mを超える規模であり、いまはその痕跡をまったく確認す

ることはできないが、今回修理した石垣の町道を挟んだ北側にも広がっていたと想定される。

なお、腐植土の中から出土したビン、瀬戸物のかけらなどについての報告は、石垣と直接結びつくものは無かったので割愛した。

調査開始が冬の近づいた11月であり、凍結、積雪にも悩まされた。さらに、石垣崩落の危険を常に気にしながら、石垣解体の合間を縫っての調査であり、十分な観察、記録作成ができなかった部分があった。また、石垣の調査ははじめてのことであり、予備知識も無く調査に取り掛かったことともあわせて反省している。(文責 丸山)





北 面

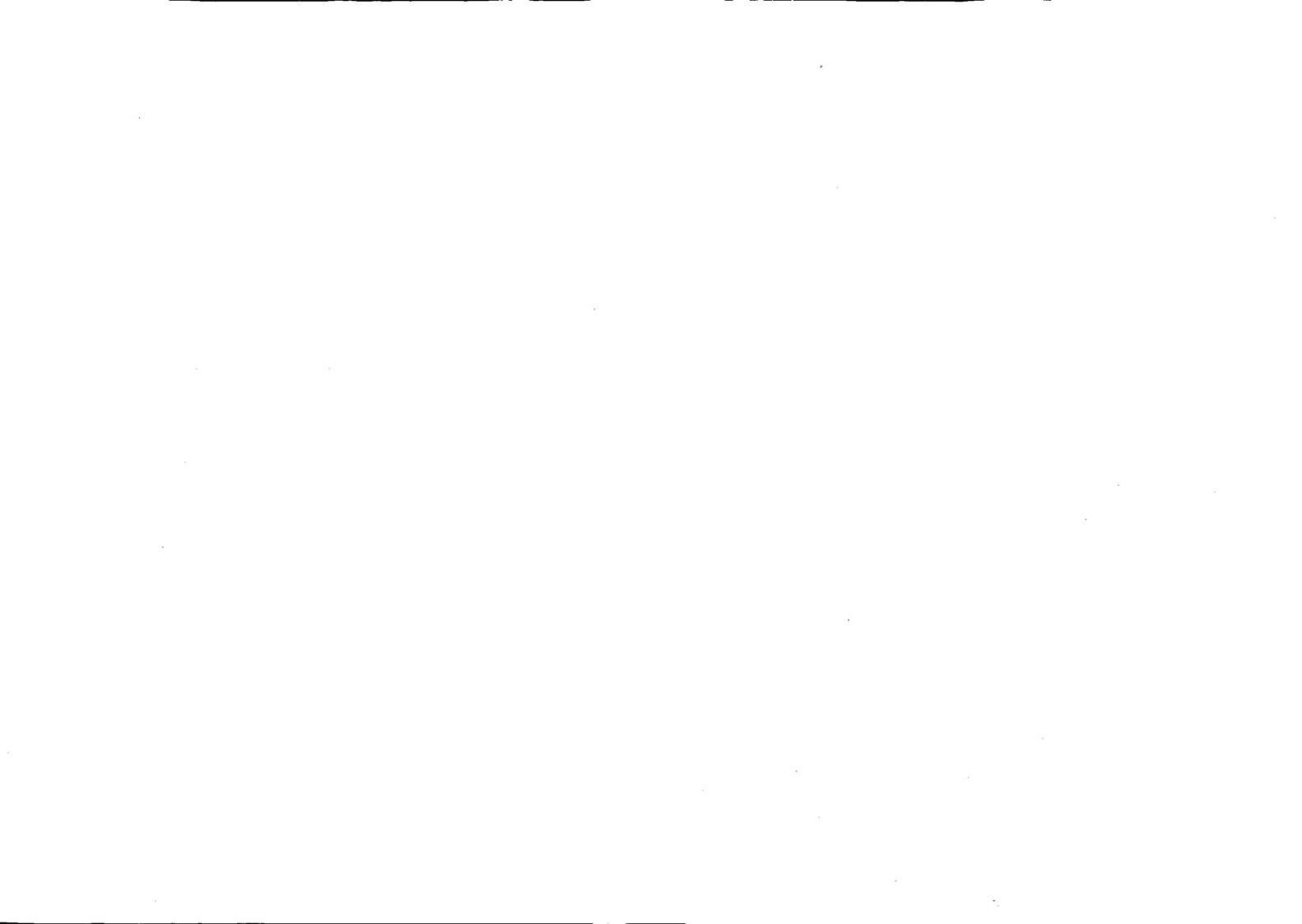
元の位置に据えた石

## 転用した石

新しく補った石

O                  1 : 40                  2M

第20図 修理工事後の大手門石垣実測図



## あとがき

今回の発掘調査は、史跡高速城跡内大手石垣の一部が平成12年11月8日に崩落し、その修理工事に伴い実施したものであります。

今回の修理工事においては、崩落箇所、更にはその周囲の石垣も緩みが著しく、範囲が広がる恐れも大きく、緊急を要するものであります。そのため、この工事に併せて石垣及び石垣周辺の発掘調査を実施し、遺構の確認調査及び記録保存を行ったものであります。

この間極めて短期間ににおける発掘調査から工事の完成までであったわけですが、工事も無事期間内に終了することができました。これらにつきましては文化庁はじめ県教育委員会など関係機関各位のご理解とご協力の賜物であると感謝申し上げるとともに、この報告書の発刊にあたりましても、各関係機関、調査員の先生方のご協力により短期間の内にまとめることができましたことに心より厚くお礼申し上げます。

なお、調査団長をお引き受けいただきました丸山敏一郎先生には、大変お忙しいお身体をも省みず陣頭指揮をとっていただきましたことに心よりお礼申し上げます。また、期間中数々のご苦労をおかけしたにも関わらず、積極的に作業に参加いただきました発掘作業員の皆さんや、測量・重機に関わっていただいたオペレーターの皆さん、また修理工事を請け負われ発掘調査にも大変ご協力いただいた（有）東部建設さんに心から感謝申し上げます。

高速町教育委員会

教育次長 伊藤 順一

## « 参考文献 »

- 高速发展町誌刊行会 『高速发展町誌（上巻 歴史編）』昭和54年  
高速发展町教育委員会 『信州高速发展の史跡と文化財』昭和58年  
高速发展町教育委員会 『史跡高速发展城跡保存管理計画策定報告書』昭和63年  
高速发展町 『史跡高速发展城跡整備基本計画書』平成12年  
高速发展町教育委員会 『高速发展城跡二ノ丸門発掘調査報告書』昭和62年  
高速发展町教育委員会 『史跡高速发展城跡二ノ丸Ⅱ 埋蔵文化財緊急発掘調査報告書』平成4年  
高速发展町教育委員会 『史跡高速发展城跡二ノ丸Ⅲ 埋蔵文化財緊急発掘調査報告書』平成8年  
高速发展町教育委員会 『高速发展 番小屋遺跡 武家屋敷遺跡 埋蔵文化財緊急発掘調査報告書』  
平成8年  
松江市教育委員会 『石垣調査報告書－史跡松江城－』平成8年  
北村勝雄 『高速发展と藩学』昭和53年  
長野県教育委員会 『長野県の中世城館跡一分布調査報告書一』昭和58年

## 高遠城跡大手石垣 石材チェックリスト

番号	表 面		裏 面		控長 (cm)	重さ (cm)	材 質	加工痕	再利用
	縦 (cm)	横 (cm)	縦 (cm)	横 (cm)					
1	23・24・33	77	24	56	49	250	安山岩		○
2	27・33	72	25	46	68	410	安山岩		
3	45	80	29	13	80	800	花崗岩	ノミ痕有り	○
4	40	113	35	60	43	500	花崗岩	表面と右側面 ノミ痕有り	○
5	35	71	47	15	74	500	花崗岩	右側面 ノミ痕有り	○
6	45	57	40	48	57	410	花崗岩	ノミ痕有り	○
7	65	102	20・10	90	115	2200	花崗岩	表面 縦にノミ痕有り	○
8	28・37・27	93	20	75	87	350	花崗岩		○
9	33	47	27	44	89	350	花崗岩		×
10	34	60	21	37	72	400	花崗岩		○
11	23	46	13	40	48	140	花崗岩		×
12	10・11・13	32	12	28	10	10	花崗岩		○
13	34・32	125	20・24	135	70・98・56	850	花崗岩		○
14	35・30・28	84	30	25	67	480	花崗岩		○
15	30・33	44・38	13	35	80	290	花崗岩		○
16	40・37	60	10	24	76	490	花崗岩		○
17	40	40	40	36	80	350	花崗岩	有り	○
18-1	40・45・30	70	40	49	95	700	花崗岩		○
18-2	50	63	25・20	68	75・60	690	花崗岩		○
19	24	61	9	34	59	240	花崗岩		○
20	17	40	10	12	47	9	花崗岩		×
21	65	39			40	280	安山岩		
22	33	102	22	48	98	830	花崗岩		
23	13・18・9	46	19	20	102	100	安山岩		×
24	43	65	46	55	53	230	花崗岩		
25	52	105	37	36	85	1290	花崗岩		○
26	29・40	38	8	18	58	200	花崗岩		
27	26	33	25	26	49	110	花崗岩		×
28	41・51・60	69	26	42	85	820	安山岩		○
29	38	87	34	50	56	520	花崗岩		○
30	23・24	61	14	40	74	190	花崗岩		○
31	30・35・17	54	18	45	110	270	花崗岩		×
32	56	68	25	18	118	1250	花崗岩		○
33	18・55・52	80	23	10	64	550	花崗岩		○
34	40・28・20	50	14	26	93	280	花崗岩		×
35	45・26	83	24	75	97	780	安山岩		○
36	20	39	14	23	78	170	花崗岩		○
37	40・43・30	66	42	63	53	360	花崗岩	表面縦にノミ痕無数有り	○
38	18・14	33	8	17	23	30	花崗岩		×
39	32・18	50	16	23	73	250	花崗岩		○

40	22・44・43	86	40	67	46	400	花崗岩		○
41	57	57		17	76	690	花崗岩		○
42	48	45	37	47	105	630	花崗岩		○
43	25・64・55	92	16	58	50	610	花崗岩		○
44	37・35・37	90	15	47	78	710	花崗岩		○
45	29	9・12・14	28	6・9・12	15・18	70	花崗岩		○
62	16	10	10	12	10	4	花崗岩		×
66	9	30	2	10	39	29	花崗岩		
69	50・46・37	82	32	64	80	800	花崗岩		○
70	27	42	20	18	67	210	花崗岩		×
71	8	17	5	17	12	4	花崗岩	右側欠損	
72	20	22	11	23	50	60	花崗岩		×
73	43	44	23	20	80	420	花崗岩		○
74	10	17	8	12	18	8	花崗岩		×
75	38・36	59	22	42	90	550	花崗岩		
76	30・43・25	64	24	53	40	250	花崗岩		○
77	10	15	5	13	14	5	花崗岩		○
78	28	45・33	16	14	39	110	花崗岩	表面 線にノミ痕有り	×
79	30	60			55	270	花崗岩		×
80	33	43	38	28	75	290	花崗岩		○
81	15	35	17	20	67	100	花崗岩		×
82	20	16	14	17	67	60	花崗岩		×
83								不明	
84	18	28	15	35	49	70	花崗岩		○
85	26	50			55	200			×
86	45	60			75	560	安山岩		×
87	23	27	17	13	60	100	花崗岩		×
88	26・15	50	20	30	115	320	花崗岩		×
89	35・25	57	10	16	43	190	安山岩		○
90	37	32	27	18	62	200	花崗岩		○
91	62	53	15	25	125	480	花崗岩		○
92	38	30・37・34	24	34	50	190	安山岩		○
93	45・47・49	93	26	34	92	1120	花崗岩		○
94	20・32	40・26	30	43	46	110	花崗岩		○
95	12	10	6	9	20	6	花崗岩		○
96	12	27	12	18	47	42	花崗岩		
97	40・23	45	13	35	67	265	花崗岩		○
98	25	57	53	20	55	210	安山岩		×
99	9	30			43	30	花崗岩		×
100	25	20	10	10	50	70	花崗岩		×
101	20	25	20	23	46	60	花崗岩		×
102	40	67	20	40	75	50	花崗岩		○
103	23・23・28	58	22	50	75	290	安山岩		×
104	54	83	46	50	57	710	安山岩		○

105	13	10	3	7	33	10	花崗岩		○
106	28	28	18	37	66	140	花崗岩		×
107	14	13	3	7	23	10	安山岩		×
108	33	35	10	17	83	260	安山岩		
109	57·43·30	40	5	20	73	350	花崗岩		○
110	23	26·17	20	15	40	50	花崗岩		×
111	4·8	16	6	8	17	4	花崗岩		
112	34·27	60	23	20	70	250	花崗岩		
113	20	20·15·40	10	20	63	80	安山岩		×
114	12	14·8	5	13	18	6	花崗岩		
115	30	60	15	25	70	350	花崗岩		
116	15	8	8	10	25	8	花崗岩		×
117	25	15	13	12	44	40	安山岩		×
118	20·14	47	14	17	75	160	花崗岩		
119								不明	
120								不明	
121	13	20		10	30	20	花崗岩		
122	12	10	4	5	20	60	花崗岩		×
123	45	60	10	34	87	700	花崗岩		○
124	40	64	10	23	108	100	花崗岩	三十七と同石	○
125	32·30·30	80	10	44	54	430	花崗岩		○
126	50·46·45	64	23	70	90	750	花崗岩		○
127	35·52·34	63·27	40	55	90	450	花崗岩		○
128	43	56	30	40	103	620	花崗岩		
129	8	16	10	7	27	10	花崗岩		
130	40	57	37	35	85	800	花崗岩		○
131	8	19	8	17	20	9	安山岩		×
132	18	30		24	44	60	花崗岩		×
133	9	9		8	19	4	花崗岩		
134	10	29		14	34	30	花崗岩		×
136	36	13			46	60	花崗岩		
137	18	52	10	40	75	200	花崗岩		
138	42	58	44	40	108	800	花崗岩		○
142	20	26	20	26	15	20	花崗岩		×
143	16·15·10	26	4	12	25	15	花崗岩		
144								不明	
145	5·9·6	21	10	17	25	90	花崗岩		×
A	24	65·34	30	66	38	125	花崗岩		
C	25·26·17	75	37	27	66	310	花崗岩		
D	42	48	40	65	102	570	花崗岩		○
1'	26	44	10	20	61	190	安山岩		
2'	6·14·5	35	3	17	20	15	花崗岩		×

2'	27-20	55	30	45	60	210	花崗岩		x
3'	15-16	63	10	62	48	120	花崗岩		
→25	15	12	18	17	20	10	安山岩		
↑38	10	11	9	10	14	4	花崗岩		
104下	6	17	5	14	13	3	花崗岩		
127 136	6	12	4	8	20	4	花崗岩		
35 69	8	24	9	27	17	9	花崗岩		
四	16	14			19	10	安山岩?		x
五	40	50	60	72	60	40	花崗岩		
六	11	24	4	14	24	20	安山岩		x
七	16	10	8	13	35	15	花崗岩		
八	45	43	38	40	85	460	花崗岩		○
九	10	20	5	13	23	10	安山岩?		x
十	52	70	20	40	70	680	花崗岩		x
十一	13	13	10	13	40	20	花崗岩		x
十二	30	17	13	18	45	60	花崗岩		
十三	88	60	23	50	98	1440	花崗岩		○
十四	12	39		18	32	40	安山岩		x
十五	18	16	12	7	35	30	花崗岩		
十六	40	80	35	70	38	340	安山岩?		
十七	8	18		16	24	9	花崗岩		x
十八	14	29	6	20	30	30	花崗岩		x
十九	14	20	7	25	17	10	安山岩		x
二十	50	55	30	50	75	570	安山岩		
二十一	11	33			48	40	花崗岩		x
二十二	30	22	10	32	63	110	花崗岩		
二十三	43	60	20	50	65	460	花崗岩		○
二十四	18	30	5	25	59	80	花崗岩		x
二十五	10	20	5	5	30	10	花崗岩		x
二十六	14	20	10	18	26	20	安山岩		x
二十七	47	76	30	46	67	100	花崗岩	表面と左側面に手斧痕有り	○
二十八	38	73	30	50	60	460	花崗岩		○
二十九	27	43	10	33	60	190	花崗岩		
三十	40	56	34	43	76	470	花崗岩		
三十一	22	30		20	30	55	花崗岩		○
三十二	28	17	28	44	48	60	花崗岩		x
三十三	33	50	18	28	115	900	花崗岩		
三十四	10	46	14	47	17	20	安山岩?		x
三十五	15	32	20	18	36	40	花崗岩		
三十六	40	50	16	30	90	500	花崗岩		x
三十七	40	64	10	23	108	100	花崗岩	124と同石	○
三十八	38	37	28	34	75	400	花崗岩		
三十九	43	37	10	20	85	230	花崗岩		○

四十	54	50	18	28	115	900	花崗岩		
四十一	30	40	26	24	45	100	花崗岩	x	
四十二	10	17	4	10	20	9	花崗岩	x	
四十三	9	18			23	10	花崗岩		
四十四	27	38	18	30	78	230	花崗岩		
四十五	4	20		10	20	4	花崗岩		
四十六	8	17		7	21	7	花崗岩		
四十七	28	40	26	34	78	250	花崗岩	x	
五十	25	20	10	15	66	100	花崗岩	x	
五十一	32	56	32	40	98	700	花崗岩		
六十七	40	70	33	30	100	430	花崗岩		○
七十一	47	27	24	23	69	350	安山岩		





① 崩落以前の大手石垣  
(黒河内太郎氏撮影「昭和31年春 石垣修理のあと」との付記あり)



② 崩落以前の大手石垣  
(撮影年月日不詳)



③ 調査開始時の大手石垣状況  
(北面 崩落の恐れがあるために防護柵が設置されている)



④ 調査開始時の大手石垣状況  
(西面 北面に比べて積み方が乱れている)



⑤ 調査開始時の大手石垣  
(北面 崩落した石材が前面に散乱している)



⑥ 調査開始時の大手石垣  
(斜めから 角石垣が崩落した状況)



⑦ 第一次石垣解体時の状況  
(北側から撮影 裏盛土、裏込石の状況がよくわかる)



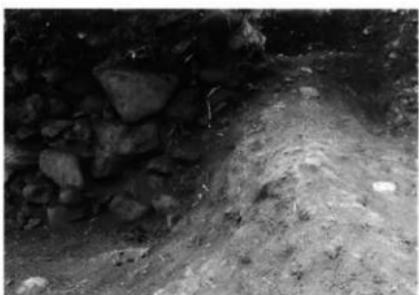
⑧ 第一次石垣解体時の状況  
(西側部分の拡大 裏込石の状況がよくわかる)



⑨ 第一次石垣解体時の状況  
(中央部の拡大 堅く叩き締められた部分と上部の境界付近の状況 堅く叩き締められた部分にも木の根が入っている)



⑩ 第一次石垣解体時の状況  
(東端 裏込石の状況がよくわかる)



⑪ 第一次石垣解体時の状況  
(東端 裏込石と堅く叩き締められた部分が急勾配で石垣に向かって落ち込んでいる状況)

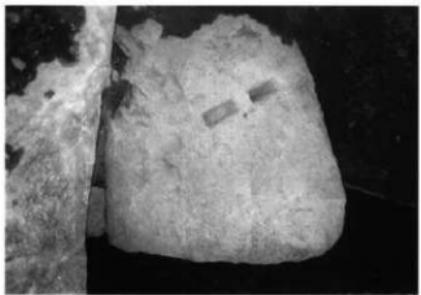


⑫ 角石垣の脇にある礎石と思われる平石



⑬ 第一次石垣解体前の石垣裏の状況

(裏込石の中に所々大きな石を据えて裏込石を安定させている)

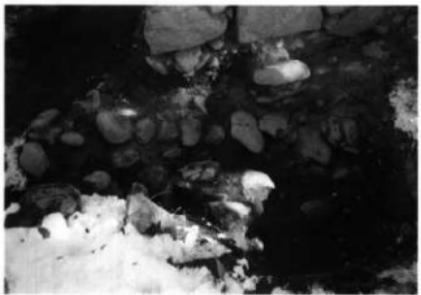


⑭ 矢穴のある石材

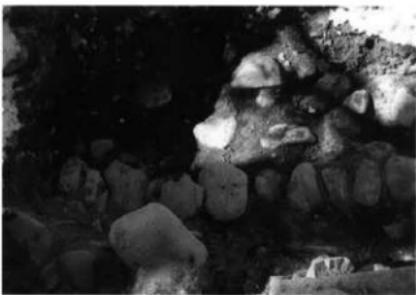


⑮ 角石垣の根石部分の状況

(根石の上の角石は解体した部分で一番大きな石材。これに比べて根石が頼りない。右側の根石は手斧で整形されている)



⑯ 石垣西面の前面に現れた石列の状況  
(奥が石垣、石垣に向かった面が揃っている)



⑰ 石垣西面の前面に現れた石列の状況  
(手前が石垣)



⑮ 石垣解体後の状況（北面の裏込石）



⑯ 石垣解体後の状況（西面の裏込石）



⑰ 石垣解体後の状況（全景）



㉗ 石垣北前面の根石下  
(土を運び突き固めて何層にも積み重ねてある)



㉘ 石垣北前面の根石下  
(第3トレンチ) の状況



㉙ 石垣裏込石下の状況  
(西から 土を運び突き固めて何層にも積み重ねて  
ある)



㉚ 石垣裏込石下の状況  
(北から 土を運び突き固めて何層にも積み重ねて  
ある)



㉛ 石垣裏込石下の状況  
(西から 写真23の拡大)



⑥石垣の解体（人力による裏込石の撤去作業）



⑦石垣の解体（クレーンで石垣を解体する）



⑧解体した石垣石材をグランドに運ぶ



⑨グランドに運ばれた石材



⑩根石撤去後の状況

（栗石はほとんどなく、基盤の上に直接根石が据え  
られている）



⑪根石撤去後の状況（写真30の拡大）



③飯島町与田切川の資材置場で石材を運ぶ



④資材置場で矢を打ち込み石を割る



⑤根固め作業の状況



⑥根固め作業完了後の状況



⑦石材を割る



⑧角の一一番根石を据える



⑧石垣を積む



⑨裏込石、裏盛土作業



⑩裏盛土用の土を混合する



⑪最終段階の裏込石、裏盛土作業



⑫最後の石を積み上げる



⑬最後の仕上げ作業



④修理工事終了後の石垣上面の様子  
(三和土を敷き詰めた状態)



⑤解体した石材で使用しなかった石材を積み上げる



⑥調査開始の式



⑦調査風景（調査開始）



⑧調査風景（断面観察と記録作成）



⑨調査風景  
(整備計画策定委員長笛本先生の現地指導)



⑤現地説明会



⑤現地説明会



⑥調査の途中で（崩落の恐れがあるための支え）



⑦調査の途中で（雪の朝の調査開始）



⑧桜咲く高遠城趾 遠景



⑨桜咲く高遠城趾と桜見物の人々

## 報告書抄録

ふりがな	しせきたかとおじょうせきおおてもんいしがき							
書名	史跡高遠城跡大手門石垣							
副書名	史跡高遠城跡大手門石垣修理事業							
卷次								
シリーズ名	埋蔵文化財緊急発掘調査報告書							
シリーズ番号								
編著者名	丸山 敏一郎							
編集機関	高遠町教育委員会							
所在地	〒396 - 0292 長野県上伊那郡高遠町大字西高遠 1806 番地 Tel0265 - 94 - 2557							
発行年月日	西暦 2002 年 3 月 29 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査 期間	調査 面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	°	′	年	m <sup>2</sup>	
史跡 高遠城跡	たかとおじょうせき 高遠町大字 東高遠字 城跡 高速町大字東 高遠2038番地 - 1ほか	385	7270	35° 49' 54"	138° 03' 53"	平成 13年 11月 ~ 平成 14年 3月	100	大手門跡 石垣修理 事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
史跡 高遠城跡		近世 近代 現代	大手石垣	無し				

史跡高遠城跡大手門石垣修理事業

**史跡 高遠城跡大手門石垣**

埋蔵文化財緊急発掘調査報告書

平成14年3月

編集・発行 高遠町教育委員会

印刷・製本 有限会社 しんこう社

長野県上伊那郡高遠町大字西高遠831

